

統合失調症の子どもを持つ父親の体験に関する文献 検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 由希 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.20780/00032262

〔資料〕

統合失調症の子どもを持つ父親の体験に関する文献検討

徳田由希*

LITERATURE REVIEW OF EXPERIENCES OF BEING A FATHER OF A PERSON WITH SCHIZOPHRENIA

Yuki TOKUDA *

キーワード：父親、体験、統合失調症

Key words : father, experiences, schizophrenia

Ⅰ. はじめに

わが国の精神保健医療福祉政策においては、「入院医療中心から地域生活中心へ」というスローガンのもと、精神障害者の地域生活への移行支援の取り組みがされている。精神科医療の現場では、精神科急性期病棟の増設や入院期間の短縮が図られているが、退院後の精神障害者を支える支援体制は未だ十分に整えられていない。

公益社団法人全国精神保健福祉会連合会は、精神障害者家族会連合会に所属する家族会員 9,320 人を対象に、「平成 21 年度厚生労働省障害者保健福祉推進事業 障害者自立支援調査研究プロジェクト『精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援等のあり方に関する調査研究』報告書」（特定非営利活動法人全国精神保健福祉会連合会 平成 21 年度家族支援に関する調査研究プロジェクト検討委員会, 2010）をまとめた。報告書によると精神障害者の家族が持つ要望は、「病状悪化時に必要な支援がない」、「困ったとき、いつでも相談でき、問題を解決してくれる場所がない」、「家族は身体的・精神的健康への不安を抱えている」など 7 つにまとめられた。

これまで介護の担い手として母親に関する家族の研究は多数行われてきた。父親と比較して母親は、出産

や育児の主たる担い手であり重要な役割とされており、いくつかの報告がある（川添, 2007a; 川添, 2007b; 菊池ら, 2004; 水野・岩崎, 2010; 佐藤, 2006; 鈴木, 2007）。しかし、父親の体験に関する先行研究は少なく、父親はどのような体験をしているのかは未だに明らかにされていない。

本研究は、精神障害を持つ子どもの父親の体験について文献以外にも手記や新聞記事などのナラティブ・データも含めて文献検索を行う。統合失調症の子どもを持つ父親の体験を理解することで、父親にどのような援助をするか検討することの一助となり、より良い患者・家族ケアに貢献できると考えられる。

Ⅱ. 研究の目的

本研究の目的は、文献検討を通じて統合失調症の子どもを持つ父親の体験を理解し、今後の課題を明らかにすることである。

Ⅲ. 研究方法

1. 文献検索方法

検索は検索 1 と検索 2 の方法で行った。

1) 検索データベースは「医学中央雑誌 Web 版 (以下、医中誌 Web 版とする)」、「CiNii Articles」、「聞

*東京女子医科大学看護学部 (Tokyo Women's Medical University, School of Nursing)

蔵Ⅱ（きくぞうツ）ビジュアル」を用いた。キーワードは「統合失調症」と「父親」と「体験」、「統合失調症」と「父親」、「統合失調症」と「父子関係」とした。

2) 検索データベースは研究者所属機関の図書館の所蔵目録であるWeb「OPAC」を用いた。キーワードは「統合失調症」と「父親」と「体験」、「統合失調症」と「父親」、「統合失調症」と「父子関係」としたがいずれもヒットは0件であった。キーワードを「統合失調症」と「家族」、「精神障害者」と「家族」と変更し、再度検索した。

検索期間は、医中誌Web版は1983年～2016年11月、CiNii Articlesは1992年～2016年11月、聞蔵Ⅱビジュアルは1985年～2016年11月、研究者所属機関の図書館Web「OPAC」は1970年～2016年11月とした。検索1では399件がヒットし、検索2では41件がヒットした。検索された文献については、統合失調症の父親の体験について記述されているものを対象に本研究目的との関連性を検証し、研究対象の可否を判断した。父親の体験について書かれていないもの、母親の体験、病気の子どもに関して書かれたもの、妻の病気について夫が書いているもの、母親(妻)が病気にかかっている子ども(夫)に焦点を当てたもの、母子関係、患者—医療者関係、介入研究は除外した。

2. 分析方法

文献、手記、新聞・雑誌記事はそれぞれ1件を1単位とした。検索1では28件が該当した。検索2では2冊の書籍が該当した。1冊の書籍は、本研究に該当する章を10件とし、11件が該当し、計39件が研究対象として抽出された(表1)。そこから父親の思いや行動が顕著に表れている記述を抽出した。抽出したのから得られた概念をまとめ、それらを的確に表すコードに置き換えた。コードから共通のテーマのものをグループ化し、各々に要点のレベルへと抽象度を上げたテーマを付与した。

IV. 結果

分析の結果、共通した10のテーマが抽出された(表2)。以下、各テーマについて事例を引用しながら述べる。父親の体験を示すテーマ名は【】で、引用は「」で表記した。

1. 【気長に子どもの病気と付き合う】

父親達は、疾患の知識を深めて治療には長い年月が必要だと考えていた。ある父親は、統合失調症の治療は長い年月がかかると学んでいた。「*分裂病(ママ)の後遺症の回復には年月がかかるから、私は気長に待つ覚悟をしている。*」そのため、「*娘を興奮させないように、私自身の考え方も変えた。*」(岡本, 1995)と学びを実践していた。

また、自身の弟も統合失調症を患う中で、妻から息子の様子が似ていることを相談された。父親はある日、息子と2人で池のほとりで休んでいると水鳥の群れを見かけ「*このまま、この鳥たちのように息子が元気になって、のびのびとした世界の中に溶け込んでいってくれたら。*」(上森, 2007)と願っていた。

2. 【ありのままに生きる】

父親達は悲観的な考えを乗り越えて、事実を肯定的にとらえるようにしていた。ある父親は、息子の発病から現在までを振り返り、「*最近は『なるようになる』あきらめの心境である。*」(淡島, 1995)と前向きに語った。

息子の登校拒否から統合失調症の存在がわかり、父親は退職後から家族会に出席し、「*ありのままに正々堂々と胸を張って生きる決心をしました。*」(力本, 1995)と語った。

さらに、家族会の結成から携わっていた父親は、「*私たち家族は、現実を直視し、ありのままの姿をさらけ出し、しかも『主役は患者会、家族会はわき役』をモットーに運動を進めていきたい。*」(高橋, 1995)と語った。

3. 【地域社会をより良くしたい】

父親達は、子どもが一人でも生きていけることを望み、子どもを受け入れる地域社会をよくしていきたいと考えていた。父親は、家族会で活動する中で「*我が子が一人で生きていける社会環境に。*」(柴田, 1995)なることを目指していた。

また、ある父親は「*地域で生きる人たちのための活動、その可能性を最大限に追求する姿勢を、…(中略)…続けている。その考え、その活動の意味を地域の人たちに理解してほしい。*」(小林, 1995)と語っている。

家族の偏見や誤解に対する危機感を訴える父親は、「*偏見のない家族、地域のボランティアに支えられ、支え合いながら『精神障害者がごくあたりまえの生活*

表1 対象文献一覧

著者	出版年	タイトル	書名(版数) / 日付朝刊夕刊	頁数/面, 出版社
浜田恭子, 堤由美子	2015	適応的な地域生活を営む統合失調症を有する子どもの両親の体験の質的分析	鹿児島大学医学部保健科紀要 25(1)	1-9.
富川順子, 森口男子	2013	統合失調症と診断された子どもを支える父親の体験—発症、精神科救急病棟入院から退院までの約5年間	精神看護, 16(1)	74-80.
仲座律子, 城間律子, 宮城敬, 他	2007	施設へ転所する患者および家族への退院支援—患者・家族の心理的变化と看護者の対応を視点にしてのアプローチ	日本精神科看護学会誌, 50(2)	562-566.
上森得男	2007	家族エッセイ 回復への道をみんなで歩みたい 最初は霧の中にいた	精神看護, 34(5)	66-67
川口めぐみ, 長谷川美香	2013	統合失調症患者の家族が抱える介護負担 入院中から退院1年未満に焦点を当て	日本看護学会論文集, 地域看護, 43	51-54.
菊池由莉, 岡本祐子	2009	統合失調症患者の親におけるケア役割受容過程の検討	広島大学心理学研究, 9	217-227.
山口美幸	1998	初めての入院で戸惑う家族への関わり 父親と母親の違いについて	日本精神科看護学会誌, 41(1)	546-548.
西友視	2015	精神科訪問看護における家族支援を考える—父親への介入による家族力動の変化—	病院・地域精神医学, 58(1)	27-30.
久場川哲二	2003	ホームレス(野宿者)の父親と統合失調症の娘	精神科治療学, 18(1)	91-94.
渡邊博幸	2014	統合失調症当事者の家族が治療を拒む時どうすれば良いか?	精神科治療学, 29(10)	1255-1260.
岩崎みずす, 水野恵理子	2013	統合失調症の子どもをもつ父親 病気への対処と向き合い方	日本健康医学学会雑誌, 22(1)	36-42.
青木秀光	2014	統合失調症の娘を抱える父親のライフストーリー: 個人の複雑な生の一端を捉えるために	立命館大学大学院先端総合学術研究科『Core Ethics』, 10	1-12.
岡田敏治	2009	これからも家族を守り、ともに生きていくために	やどかりブックレット・家族へのメッセージ2 隠さぬで生きたい!! 統合失調症の娘とともに	104-107, やどかり出版.
赤沼信夫	1995	子どもと親の私権	こころの病い2 家族の体験	205-207, 中央法規
淡島正也	1995	発病のころ—反省を込めて	こころの病い2 家族の体験	55-61, 中央法規
小林時治	1995	「家族」の意味を問い続け	こころの病い2 家族の体験	142-152, 中央法規
中村友保	1995	よい医師を、よい病院を	こころの病い2 家族の体験	138-145, 中央法規
岡本正二	1995	再び入院させないところに誓って	こころの病い2 家族の体験	22-28, 中央法規
力本芳樹	1995	空き地となった両隣	こころの病い2 家族の体験	117-119, 中央法規
柴田昇	1995	入退院十三回の息子と共に二十数年	こころの病い2 家族の体験	125-130, 中央法規
高橋慶雲	1995	娘とともに	こころの病い2 家族の体験	221-226, 中央法規
塚本幸一	1995	精神障害者と地域のなかで	こころの病い2 家族の体験	215-220, 中央法規
山元忠孝	1995	一五〇万人の患者と家族の結束を	こころの病い2 家族の体験	168-173, 中央法規
朝日新聞	1986	精神分裂病の長男殺した父に猶予刑 東京地裁	東京本社版. 7月30日夕刊	1
朝日新聞	1988	入院患者が失踪、凍死「退院」扱いで処理 清水市の精神病院	東京本社版. 3月8日夕刊	14
朝日新聞	1990	父親が息子殺し自首 大阪・住之江区	大阪本社版. 10月25日朝刊	31
朝日新聞	1991	父「精神分裂病で、ベッドに縛っていた」火事で死亡の長女	東京本社版. 9月3日夕刊	19
朝日新聞	1997	家庭内暴力の息子を絞殺、義父に実刑判決 津地裁	名古屋本社版. 6月18日夕刊	3
朝日新聞	2005a	学生無年金訴訟、「一番の願いかなう」関係者ら評価の声	西部本社版. 4月22日夕刊	11
朝日新聞	2005b	年金、老後の話じゃない 相次ぐ「学生無年金訴訟」「制度知らない人多い」	西部本社版. 5月27日朝刊	17
朝日新聞	2006	「初診日」を拡張解釈 弁護士「血通った判決」 学生無年金訴訟	東京本社版. 3月28日朝刊	31
朝日新聞	2007	父親に懲役12年を求刑 一関・統合失調症の次女殺害事件	東京本社版. 9月5日朝刊	23
朝日新聞	2008	父「生きがいもらった」 学生無年金訴訟、最高裁も原告勝訴	東京本社版. 10月18日朝刊	31
朝日新聞	2009	(裁判員法廷@徳島) 被告の心情明らか 精神障害の長男殺害・遺棄 2日目	東京本社版. 11月19日朝刊	26
朝日新聞	2010a	(追) 無理解 生んだ悲劇 統合失調症の長男、父が切りつけ	東京本社版. 9月3日朝刊	31
朝日新聞	2010b	統合失調症の長男殺害、父親に実刑判決 「心身疲弊だが結果重大」	東京本社版. 9月25日朝刊	35
朝日新聞	2011	(焦点再訪) 精神障害、家族の孤独 相次ぐ介護殺人事件	東京本社版. 9月25日朝刊	29
藤田知也	2009	家庭内暴力の哀しい結末 母親が語る修羅場の家 大阪バラバラ殺人・62歳父親逮捕	週間朝日. 5月29日号	126. 朝日新聞出版
伊東隆太郎, 諸永裕司	2001	警察も病院も受け入れず 大阪の児童殺傷、再発防止に必要なもの	AERA. 6月25日号	82. 朝日新聞出版

表 2. 統合失調症の子どもをもつ父親の体験のテーマ

1.	気長に子どもの病気と付き合う
2.	ありのままに生きる
3.	地域社会をより良くしたい
4.	医療に対する期待と不信・憤りを感じる
5.	距離を置いて家族を気遣う
6.	将来に不安を感じる
7.	家族を守る責任を感じる
8.	心の内を語れない
9.	子どもに対する申し訳なさ
10.	子どもの対応に途方に暮れる

ができる社会』が一日も早く実現されること。」(塚本, 1995)を望んでいた。

さらに、病院家族会が必要であるとする父親は、「精神病問題でいちばん嫌な思いをするのは、…(中略)…偏見が捨てられないこと。」(山元, 1995)と考える、活動を行っていた。

4. 【医療に対する期待と不信・憤りを感じる】

入院が子どもにとって不本意となってしまうことが多い中で、父親達は子どもを思い葛藤していた。医療者との連携について父親は「病院も医者も多く存在するが、できれば子どもの病状をよく理解できること、そして親のことについても柔軟に判断できる医者めぐり会えること。」(赤沼, 1995)を期待していた。

また、閉鎖病棟に転院した娘を病院の保護室で38歳の若さで亡くした父親は「ここで三年たった。娘は、太り、ろれつは回らず、よだれを垂らし、ヨタヨタ歩きで精神病患者とはかくも哀れな姿かと、驚かすにはいられぬ容姿を見せていた。『この病院ではとても病気が治るどころではない、一刻も早く転院せねば娘は殺されてしまう』と思うようになり、それからは、良い医師、よい病院を夢中になって探し歩くことになった。」(中村, 1995)と自らの経験を振り返っていた。

入院中の患者が離院後亡くなった事件では、病院が失跡届を出さず家族の同意を取り付けて「退院」として処理をした。父親は「退院はもう少し待ってくれるよう頼んだが、医者が『患者がいなくなれば退院扱いをするのが病院の決まりだ』というので、仕方なく同意した。」(朝日新聞, 1988)ことを語った。

5. 【距離を置いて家族を気遣う】

多くの家族は母親が子どもの世話の第一人者を担い、父親はそのサポート役を引き受けていた。岩崎と水野

(2013)は「父親は母親とは異なる責任感をもって子どもと接していると考えられ、家族など周囲の人々と少し距離を置き、間接的に統合失調症の子どもを日常的ケアを行っている。」ことを明らかにした。

また、菊池と岡本(2009)はケア役割受容過程について「“仕事に打ち込む”は全て父親による語りであり、父親は子どもの発病初期にはケア場面から撤退する傾向がある」と指摘している。

さらに、富川と森口(2013)は父親について「現在起きていることの原因を分析しようという気持ちが強く、…(中略)…子どもとの距離を調整しつつ言葉を伝えようと手紙を書いたり、…(中略)…行動に重点を置いている。」ことを明らかにした。

実際にある父親は、娘が病気になってからは妻にほとんど任せて「私の役割は娘の送り迎えや外食するときのドライバーくらいです。」(岡田, 2009)と語った。

6. 【将来に不安を感じる】

統合失調症の予後に楽観できないと感じる家族は多く存在した。障害基礎年金支給を求めて国を訴えた男性の父親は「自分が年老いた時、障害を持った我が子がこのまま年金が受給できずにいたら、どうなるのか。」(朝日新聞, 2006)と語った。

学生無年金訴訟に対して、原告を支えてきた父親は「将来、(統合失調症患者で)無年金になる人は今も大量に発生している」(朝日新聞, 2005b)と懸念していた。

7. 【家族を守る責任を感じる】

父親達は自分の家族を守る責任者であると考えていた。浜田と堤(2015)は、父親が子の発病を隠して「体面の維持という対処行動をとっていた。…(中略)…しかし、父親は、自身の悲しみがあっても、自分が気丈に家族を支え守らなければならないという家族の保護者としての責任を感じ、自分の悲しみをうちに閉じ込めていた。」ことを明らかにした。

青木(2014)は、「統合失調症の子を抱える父親としての責務…(中略)…がAさん(父親)の生き甲斐。」という解釈を示している。

西(2015)は、母親の他界に伴い息子と2人暮らしになった父親について、「たった一人の家族である自分が一人で支えなければならない。」思いに至ったと述べた。

障害基礎年金の受給を断られた父親は、「初診日の

とき20歳を超えていたばかりに年金を支給されない人は全国に大勢いる。その救済に向けた大きな一歩となると思う。」(朝日新聞, 2005a)と話した。障害基礎年金を受け取れなかった男性が国に支給を求めた裁判で父親は、「自分が亡くなったら、息子はどのように生きていくのか。」(朝日新聞, 2008)との思いで判決を待っていた。

統合失調症の長男を殺害した事件では「妻から『私、殺されるかもわからん』と言われた。『わしが(長男の)面倒を見るから別に暮らすか』といった。大変だけど、どうしようもなかった。」(朝日新聞, 2009)と語っている。

また、娘の暴力に悲観した父親は「自分一人では世話をし続けることは無理だ。」と車の中で娘を殺害した(朝日新聞, 2007)。

ある父親は、「僕の目の黒いうちに(自分のことは自分でできるように)なってもらわんとあかん。」(川口・長谷川, 2013)と述べた。

8. 【心の内を語れない】

不安や葛藤を言語化出来ずに様々な反応として表出する父親もいた。仲座ら(2007)は「父親はA氏(息子)を支えることに必死で、家族(父親)自身がフォローされることが少なく心の内を語る場がなかったのではないか。」と示唆している。

また、子どもの病気の受容について渡邊(2014)は、「父はその不安を払い落としたいかのように、強迫的に、時には暴言や暴力に訴えながら、本人に就労させるために東奔西走し、本人がその期待に応えられないと、怒りを爆発させることが繰り返された。」と父親の様子を振り返った。

ある父親は、息子に対する恐怖から斧で襲った。「(息子を)家の恥だと思った。自分の虚栄心が強かった。どこかに相談して解決すれば良かった。」(朝日新聞, 2010a)と法廷で語った。

山口(1998)は息子が初めて入院した父親について「父親は子供に対する期待感、特に男の子に求めるものは大きいと思われる。この思いが発病という状況で一気に崩されたように感じ、叱咤激励したことは理解できる。」と述べている。

9. 【子どもに対する申し訳なさ】

介護の行き詰まり感から、心中を決意する父親も少なくない。会社勤めをしながら男手一つで3人の子どもを育てた父親は、状態が悪化する娘の介護でふいに

自殺願望が芽生え、心中を考えて「ごめんな。ごめんな。」とささやき娘を殺害し自殺を図った(朝日新聞, 2011)。

息子の再発の可能性を告げられ、無理心中を考え殺害した父親は、日記に「ふびんに思う。息子を連れていく。ごめんなさい。」(朝日新聞, 2010b)と記していた。

娘を2歳で施設に預けたホームレスの父親は、「女房が自分と同じ精神病で、2人の子どもをすぐ施設へ預けた(児童相談所の命令で)ことは今でも子どもたちに対し不幸なことをしたと思っている。」(久場川, 2003)と語った。

10. 【子どもの対応に途方に暮れる】

家族の高齢化や家族成員が抜けることによる役割変更によって、子どもの対応が手に負えないと感じる父親も見られた。母親が行っていた子どもの世話を代わって父親が一人で担うなどの中で、子どもの対応が困難と感じる父親達もいた。ある父親の娘は妄想により暴力行為があり、警察に通報して強制的に入院した。父親は「第三者なら耳を貸しても、親の言うことは聞かない。娘のことを考えれば病院へ入れるしかない。でも、今のままでは受け入れ先がないんです。」(伊藤・諸永, 2001)と話していた。

家庭内暴力をふるう義理の息子を車中で絞殺した父親は、「気づいたらぐったりしていて。」(朝日新聞, 1997)と警察に出頭した。

クリーニング店を営む父親は、店が火災に遭い統合失調症の娘が亡くなった。娘の片足はロープでベッドに縛られていた。父親は「(長女に)精神障害による放浪癖があったため、夜間だけロープをかけていた。」(朝日新聞, 1991)と話した。

ある父親は、10年前から入退院を繰り返していた息子を殺したと自首をした。「日ごろから息子が殴るなどの暴行を加えるため、殺そうと思っていた。(本人)」(朝日新聞, 1990)と話した。

父親の様子をよく知る近くの住民は「自宅からは大きな物音や雄叫び、大音量の音楽、長男の笑い声や奇声が届いてきた。ボコボコと音がして『オリャー』と叫んでいれば暴力だろうと思うこともあったが、近所におっても怖くて何もできなんでしょう。」(藤田, 2009)と状況を振り返った。

V. 考 察

父親の体験は、子どもに対する体験、家族成員に対する体験、地域社会に対する体験から語られていた。このことから、父親の体験の10のテーマを「統合失調症の子どもに対する父親の体験」、「妻やその他の家族成員に対する父親の体験」、「地域社会に対する父親の体験」の3つの視点に分けて考察する。

1. 統合失調症の子どもに対する父親の体験

父親は統合失調症の子どもに対して、【家族を守る責任を感じる】、【将来の不安を感じる】情動を抱いていた。ポジティブな情動として【気長に子どもの病気と付き合う】があり、ネガティブな情動として【子どもに対する申し訳なさ】、【子どもの対応に途方に暮れる】思いを抱いていた。

父親達は子どもの発症によって父親として子どもとの今までの向き合い方とこれからの接し方を考えていた。川口ら(2013)は、家族が入院中から退院1年未満という早期から「経済的な重荷」を訴えていることを明らかにした。父親達は提供できるサポートとして経済的サポートを選び、時間的に余裕のある定年後から子どもと共に過ごし、子どものことを考える時間を作っていた。

発達障害児を育てる父親達の生活体験について、今西(2013)は「子どものことでわからないことがあっても何をどのように相談していいのかわからないまま、母親頼みになってしまうため、家庭内で孤立してしまう傾向にあると思われる。」と述べている。統合失調症の父親も同様に、関わりにくさに翻弄され、相談相手も限られ、何をどのように相談すればよいかわからない状況に陥ってしまうと考えられる。また、和田ら(2013)は高機能広汎性発達障害をもつ父親の心理的体験過程について「母親が中心になって育児や園・学校とのやり取りを行う家庭が多い場合、父親は子どもの特性を経験的に知る機会を得にくく、障害児であることの実感や特性の理解には父母間で差が生じやすくなる」と述べている。統合失調症の場合、多くは思春期以降に発症するため、病気や障害が表面化しにくい。大きな問題もなく育った子どもが、思春期を過ぎて様子が違うことに母親が気付いても、父親は子どもについて知る機会がなかったために、子どもを取り巻く状況や子どもの病気を理解することが難しいと考えられる。以上のことから、今回の研究においては、発達障害の子どもをもつ父親の体験と共通していることが多

いことが考えられる。

また【子どもの対応に途方に暮れる】家族について、母親が悲嘆すると父親は、自分がこの状況を凌がなければならないと感じていた。このような状況は、家族が孤立してしまう可能性が大きいと考えられる。専門職やピアサポートなどによる速やかな支援が必要である。

2. 妻やその他の家族成員に対する父親の体験

父親は妻やその他の家族成員に対して【家族を守る責任を感じる】、【将来の不安を感じる】、【こころの内を語れない】思いを抱き、【距離を置いて家族を気遣う】対処行動を行っていた。

わが国では性別役割分業が残る中で子どもの誕生によって夫婦のパートナーシップが薄れる。柏木(2011)は、子どもの誕生と夫婦関係の変化について「日本では子どもの誕生を機に夫婦のパートナーシップは薄まり、子どもと母親との関係が強まる」と述べている。主に経済面での役割を担う父親は、子育てを妻に任せきりにしたことを後悔していた。その後悔と責任から、家族の最終意思決定者の役割を担っていた。水野・岩崎(2010)は統合失調症の子供をもつ母親としての体験について「夫について語る母親はほとんどなく、…(中略)…最も身近な存在であるはずの夫にも積極的に助けを求めることをしない母親の姿勢」があることを示した。一方で父親は、「妻を労わる気持ちを持ちながら、それをストレートに表現できずにいた父親」(岩崎・水野、2013)の存在を示した。父親が自らの体験を肯定的に受け止めるために、父親の語りを促す支援が重要である。

3. 地域社会に対する父親の体験

父親たちは社会に対して、【ありのままに生きる】、【地域社会を良くしたい】、【医療に対する期待と不信・憤りを感じる】思いを抱いていた。

統合失調症の家族は、子どもの適切な対応方法や知識を得るために努力や苦勞をしていた。濱田ら(2007)は、長期入院精神障害者家族の経験について、「精神科医療を利用する当事者としての立場からの意見や要望を持っていた」ことを明らかにした。父親達は自分たちと同様に苦しむ人を減らし、統合失調症の子どもやその家族が暮らしやすい地域社会にすることを願っていた。医療従事者は積極的に父親の語りを促すと共に、家族会や社会資源など必要な情報提供を行い、家族と共に当事者が暮らしやすい地域社会にしていく行

動を起こすことが必要である。

VI. 結 論

1. 父親達は、経済的サポートを中心に間接的に子どもを支え、時間的余裕が増えた以降に子どもへの関わり方や父親自身の人生について考えていた。
2. 父親達は子どもとの関わりに迷いながらも家族成員の最善を考え、最終意思決定者の役割を担っていた。
3. 父親達が自らの体験を肯定的に受け止めるために、父親の語りを促すような支援の充実を図る必要がある。

謝辞

ご多忙中、本研究にご指導くださいました教員の方々に深く御礼申し上げます。本論は平成28年度東京女子医科大学大学院看護学研究科課題研究論文の一部を加筆修正したものであり、21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conferences にて一部を発表いたしました。

引用文献

- 濱田由紀, 田中美恵子, 横山恵子, 他 (2007). 長期入院精神障害者の家族の経験: 退院促進および地域生活維持のために求められる家族への看護援助の検討. 日本精神保健看護学会誌, 16 (1), 49-59.
- 今西良輔 (2013). 発達障害児を育てる父親の生活体験—3人の父親と息子たちの歩み—, 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, 9 (1), 27-34
- 柏木恵子. (2011). 父親になる、父親をする 家族心理学の視点から. 岩波書店
- 川添郁夫 (2007a). 統合失調症患者をもつ母親の対処過程, 日本看護科学会誌, 27 (4), 63-71.
- 川添郁夫 (2007b). 統合失調症の子供を持つ母親が体験する自己成長過程. 日本精神保健看護学会誌, 16 (1), 23-31.
- 菊池美智子, 山田浩雅, 佐竹裕美, 他 (2004). 精神科初回入院患者の親の体験と看護援助. 愛知県立看護大学紀要, 10, 33-40.
- 水野恵理子, 岩崎みすず (2010). 統合失調症の子供をもつ母親としての体験. 日本健康医学会雑誌, 18 (4), 157-164.
- 佐藤朝子 (2006). 精神障害者を子にもつ母親の体験 女性の生活史の視点から, 日本赤十字看護大学

紀要, 20, 1-10.

- 鈴木砂由理 (2007). 精神科救急病棟へ初回入院した母親の体験と不安が希望へと変容する看護援助 精神科救急入院料届出病棟がスタートして. 日本精神科看護学会誌, 50 (2), 18-22.
- 特定非営利活動法人全国精神保健福祉会連合会 平成21年度家族支援に関する調査研究プロジェクト検討委員会 (2010). 『平成21年度厚生労働省障害者保健福祉推進事業 障害者自立支援調査研究プロジェクト 『精神障害者の自立した地域生活を推進し家族が安心して生活できるようにするための効果的な家族支援等のあり方に関する調査研究』報告書. 東京. 特定非営利活動法人全国精神保健福祉会連合会 https://seishinhoken.jp/files/view/articles_files/src/5.pdf (2018/9/8 アクセス)
- 和田浩平, 林陽子 (2013). 高機能広汎性発達障害児をもつ父親の心理的体験過程について, 小児の精神と神経, 53 (2), 137-148.